

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 讃岐国分尼寺跡周辺を訪ねる

講師 鎌田 良博

(讃岐国分寺跡資料館友の会会員)

渡邊 誠

(市文化財専門員)

平成26年2月23日(日)

共催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

1 摩尼輪塔まにりんとう（市指定文化財）



摩尼輪塔とは石造物の一種です。

摩尼輪とは、仏道の苦しい修行に耐え、仏道を極めた者の位をあらわすもので、その意味から、寺院という神聖な空間との境界を示し、そこに立ち入る際に乗り物から下りる（下乗）という意味を示すものとなったと考えられます。そのため、下乗石とも言われています。寺院などの聖域の入口に建てられ、この塔の先から参拝者は馬などの乗り物を降りなければならなかったようです。

摩尼輪塔は、楠尾神社の東の小高い場所に南面し、いくつかの石造物とともに建っています。地元には伝わる話では、本来は同様なものがいくつかあって、領主松平頼重公が現存

する一基以外を白峰に移したと言われています。この摩尼輪塔は本来、楠尾神社の下乗石ですが、現在ではやや不自然な場所に立っているように思えます。しかし、楠尾神社が天正年間（一五七三〜九二）の兵火で焼失するまでは東面東馬場であったようで、この場所に残っているのは、このためだと考えられています。

この摩尼輪塔は、直径三十センチの円形の塔身の縁に連珠文をめぐらした月輪の中に胎蔵界大日如来を示す梵字（ア）が薬研彫りされており、その下の方柱の前面には「下乗」の文字が刻まれています。このような形状から地元では「たいこ神さん」と呼ばれています。

同様な形態のものは、白峰寺の東約三百メートルの位置に笠塔婆（県指定有形文化財）と呼ばれる下乗石があります。全国的な類例は少なく、有名なものとしては、奈良県桜井市多武峯の談山神社の摩尼輪塔があります。この摩尼輪塔は、塔身が八角形のもので製作年代（鎌倉時代後期…一三〇三年）が判明しており、国の重要文化財に指定されています。

2 楠尾神社

楠尾神社は、袋山から南西方向に派生する舌状の丘陵の先端、瘤状にやや隆起した丘陵の先端に鎮座しています。大昔、忌部日下大人いんべのくさかのうしという人が玉依姫命たまよりひめのみことを祀って楠尾大神と崇めました。当時、社地に楠の大木があったことから社号となり、欽明天皇の御世に靈異があつて、以来楠尾八幡宮とたたえ、新居郷の産土神うぶすながみとなつたといわれています。

天正年間（一五七三〜九二）の兵火で焼失するまでは東面東馬場であつたようで、現在のように南面南馬場となつたのはその後の再建時のようです。旧馬場と言われる地には、下乗の石標（現在は大善寺地内）があり、その書は後小松天皇の御筆跡と言われています。

※ 楠尾神社経塚出土遺物（市指定有形文化財）

楠尾神社境内で見つかった経塚の出土遺物は、明治二十三年（一八九〇）に楠尾神社の社殿を拡張した際に、現在の本殿裏の丘の頂上部から出土したものです。経塚自体はすでに失われているため、詳細な内容はわかりませんが、経塚は盛土によつて塚のような形態をとる場合が多いため、この経塚も同様なも



のであったと考えられます。経塚は末法思想が広まった十一世紀の後半から盛んに作られました。末法の世（日本では一〇五二年が末法元年にあたりとされています。）を経て弥勒如来が再びこの世の救世主として現れる時までこの経典保存が埋経の本来の目的ですが、のちに往生祈願や追善供養のためにも行われました。

3 土居の宮（新居氏の館跡）

新居氏の館跡の伝承地は「土居の宮」の称が残る国分寺町新居中筋です。現在、館跡推定地とされる場所は、奥の谷から流下した扇状地形を成し、南北に長い中央微高地の地形を呈しています。住宅の建築等によって周辺は大きく改変されており、館跡に直ちに結びつく遺構を認めることはできませんが、その西側は、地形や坂川の様子から流露が自然要害をなしており、南東部は細い堀状の水田が鉤型に残っているなど、館跡を示す非常に興味深い点がいくつも認められます。このほかに周辺には大楠などの樹木が茂り、屋敷神の



小祠が残存しています。また、この地が阿野郡から香西郡へと抜ける二つのルートを押さえる要所である点も非常に重要です。

新居氏の詰め城である新居城は、この館跡のすぐ北側に位置する城山じょうやまと考えられています。その山頂部にはいくつかの平坦面や堀状の窪みが確認されています。

この他に、新居氏に関連する中世城館には、『南海治乱記』や『南海通記』に登場する新居宮尾城（新居城もしくは大谷城）という城跡があります。これは、先の楠尾神社の地に比定されています。神社境内地のため、遺構などの詳細は分かりませんが、新居氏の居城として考えられています。

この城で、旗竿を軍勢に見せかけて立てたということが記されているように、この新居地区周辺が、長宗我部氏と香西氏との合戦場の一つの舞台だったことが分かります。

4 五輪塔

てんどうす

おおすみのかみすけとら

すけとも

土居の宮の西方、天童子の畑の傍らに新居氏遠孫の建立した大隈守資虎・資友父子の五輪塔墓があります。天正年間（一五七三〜九二）の頃、土佐の長宗我部軍が侵入してきたのに対し、大隈守資虎・資友父子は激しい戦いに敗れました。父子の首実驗が東川西で行われ、この地に葬られたとの伝承があり、首塚の呼び名もあります。

5 真鍋林禿りんとくの墓

国分尼寺の北に真鍋神社があり、隣接して東側に林禿の墓があります。

林禿とは、真鍋（真部）弥介が出家して号した名で、戦国時代香西氏の内紛の折、父助兵衛とともに、香西伊賀守佳清の執事であった新居大隈守資教を香西の成就院で討ちました。真鍋家は、代々武勇の者として知られており、弥介はこの時十七歳であったと言われています。出家して新居大隈守の居城（城山）のふもとに住み、戦いで亡くなった人々の霊を弔いました。



真鍋林禿の墓



真鍋神社

6 春日神社



春日神社の
狛犬

藤原家成の創建といわれ、元龜年間（一五七〇〜七三）に新居大隈守資教が社頭を再興し、社領を付して主君香西佳清の眼病平癒を祈ったと言われています。「玉藻集」には「春日大明神・新居村社人治部兼帯」とあります。讃岐国分尼寺の守護神社と言われており、全国的にも珍しい備前焼の一对の狛犬があります。

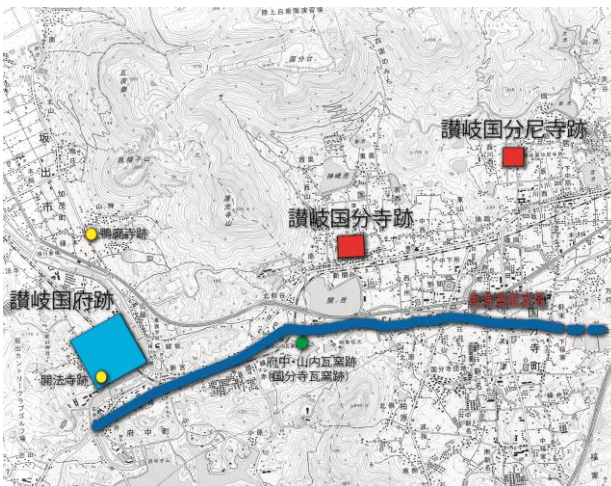
7 史跡讚岐国分尼寺跡（国指定文化財 史跡）

しせきさぬきこくぶん に じあと

讚岐国分尼寺は、正式には法華滅罪之寺と言ひ、天平十三年（七四一）に聖武天皇の詔勅によつて讚岐国分寺とともに

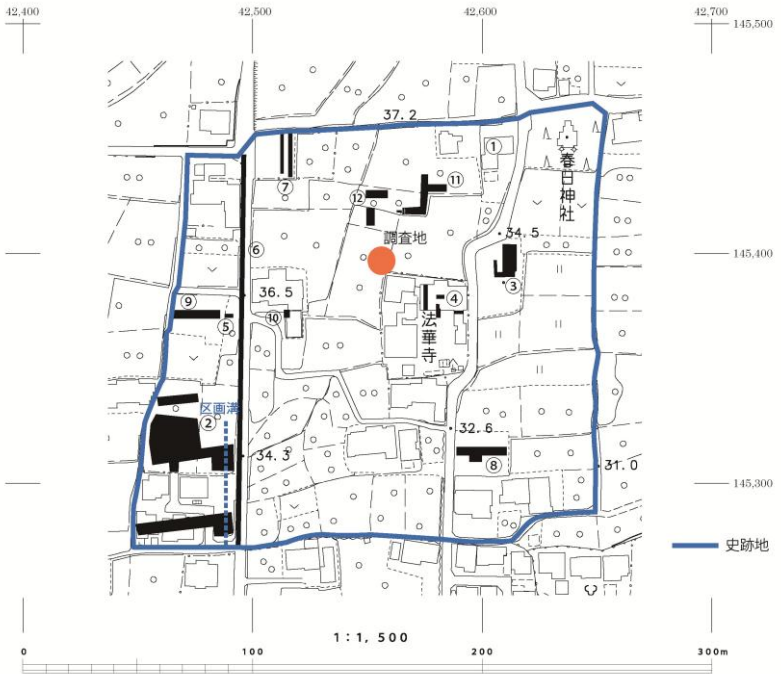
建立され、鎮護国家、讚岐国における仏教の普及という大きな役割を担つた国営の寺院でした。讚岐国分尼寺の詳細な履歴はわかりませんが、寛政七年（一七九五）に高松藩主松平頼儀公によつて金堂礎石の北西隅に現在の観音堂が建てられました。弘化元年（一八四四）には町内の長明寺の住持、隆乗師によつて真宗寺院として復興され、法華寺と称する寺となったようです。

讚岐国分尼寺跡は、讚岐国分寺跡の北東二キロメートルに位置します。現在の法華寺の境内に金堂跡



特別史跡讚岐国分寺跡と史跡讚岐国分尼寺跡 史跡讚岐国分尼寺跡の石碑

くなり、次第にその規模や機能も縮小していったと考えられています。そのため、伽藍配置などの構造やお寺の規模を確定できる資料は得られていませんでした。



と推定される礎石が残っていることや
近隣で瓦が多数採集されていたことな
どから、この法華寺を中心とした東西
一八〇〜二一〇竪、南北一八〇竪の範
囲が、讃岐国分尼寺跡として昭和三年
二月に国の史跡に指定されています。

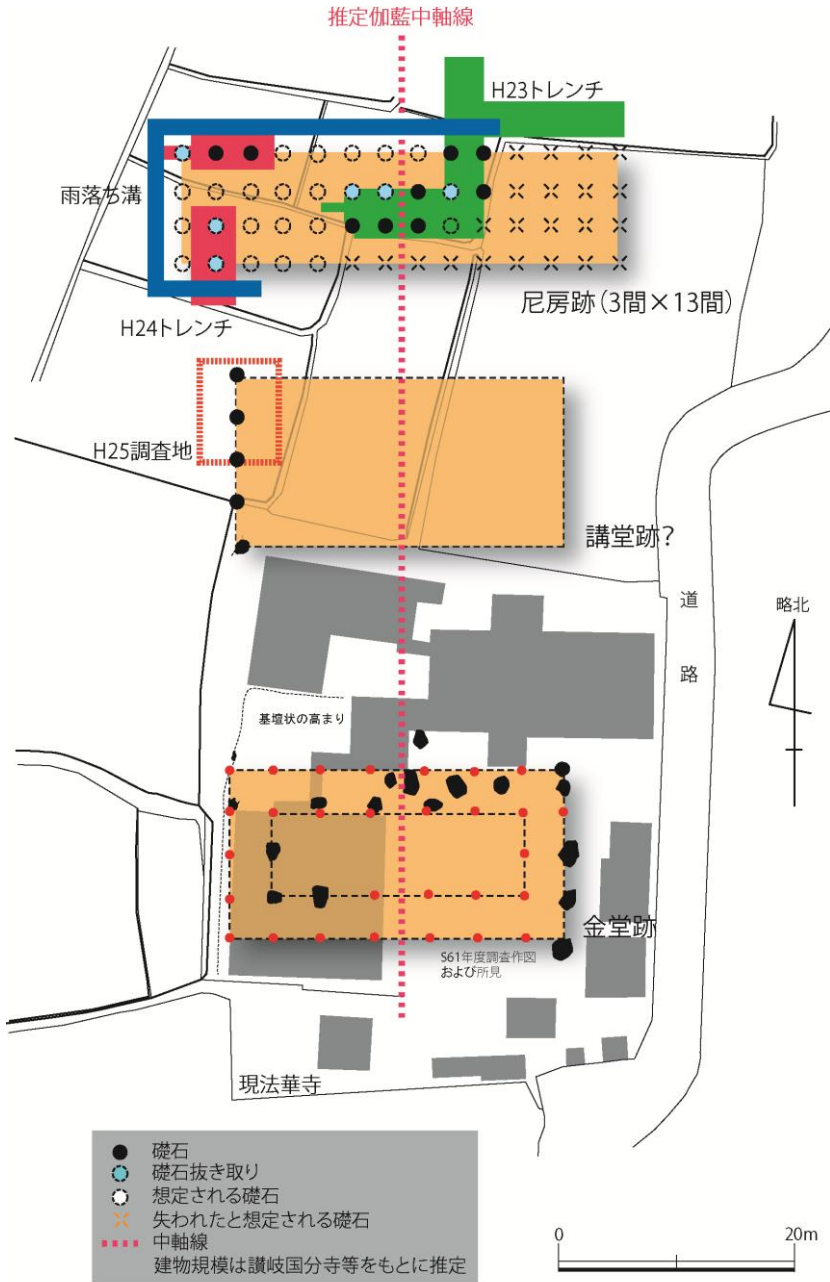
昭和五十七年の香川県教育委員会に
よる発掘調査によって、寺域西側を区
画する溝が確認されており、その成果
によって、方一町半の寺域が復元され
ています。また、この区画溝から十一
世紀の土器が出土し、溝が埋没し始め
ていたことが確認できたことから、平
安時代後期以降に維持管理がなされな

平成十八年度以降調査を進めていく中で、平成二十三年度の調査で尼房跡と考えられる建物跡、今年度の調査で講堂跡と考えられる礎石建物跡が確認され、伽藍の構成が明らかになりつつあります。

特に、尼房跡は礎石の多くが後世に抜き取られていましたが、比較的良好に残っている箇所も多く、東西方向が十三間（二・九五×十三 三八・三五[㊦]）、南北方向が三間（三・二四、三・八四、三・五四 計一〇・六二[㊦]）の規模に復元できることが判明しました。これは讚岐国分寺跡の約二分の一の規模であります。地覆と呼ばれる構造材も出土しましたが、讚岐国分寺跡の僧房跡のように良好には残っていないことから、具体的な部屋割りはまだわかっていません。

また、この尼房跡の発見によつて、現法華寺境内の金堂跡と尼房跡の間に空間があり、講堂跡が存在している可能性が想定できるようになりました。

二月から開始しました今年度の調査では、先の講堂跡の存在を確認すべく実施しております。その結果、想定された位置で三つの大型の礎石を確認することができ、講堂と想定できる建物跡が、非常に良好に残っていることが判明しました。建物規模や構造などについては今後の調査成果によりますが、讚岐国分尼寺跡の新たな価値が発見されました。



- 礎石
- 礎石抜き取り
- 想定される礎石
- ✕ 失われたと想定される礎石
- 中軸線
- 建物規模は讃岐国分寺等をもとに推定

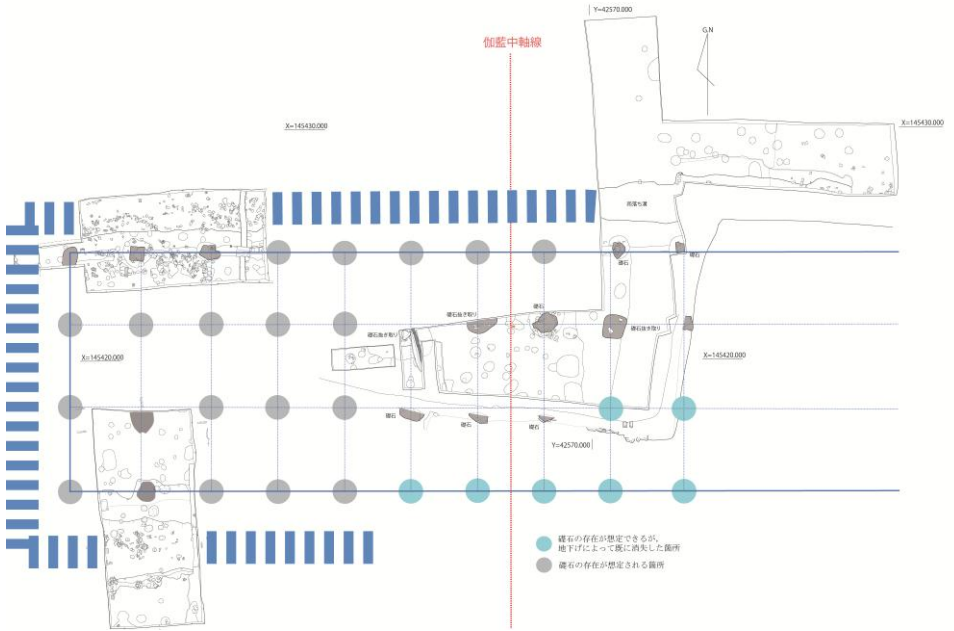


この他、周辺の調査などの出土遺物から、十二世紀頃までは瓦の修理等がなされ、尼寺が存在していた可能性が想定できるようになってきました。尼房跡の調査では、中世には新しい土地利用がなされており、その頃には建物もなくなり、一定の削平の後に埋没してしまったものと思われます。

また、讃岐国分尼寺跡は現在も段差のある地形が残っていますが、調査によつて建立された当時も緩斜面をひな壇上に整形して建物を建てたことがわかってきています。その点で、広い平坦地に建立された讃岐国分寺とはまた異なる景観が広がっていたようです。

以上の調査成果は讃岐国分尼寺跡の往時の姿の一端に過ぎません。仁和二年（八八六）に讃岐国司として赴任した菅原道真が尼寺を訪れた際に魅了された白牡丹、花に囲まれた尼寺の姿がようやく見えはじめたのかもしれない。

今後の調査に御期待ください。



尼坊跡平面図と調査写真

コラム 菅原道真と讚岐国分尼寺

仁和二年（八八六）から寛平二年（八九〇）讚岐国司として赴任した菅原道真は、讚岐国分尼寺を訪れ、白牡丹の美しさを愛でて漢詩に詠んでいます。境内にはその漢詩を刻んだ「白牡丹の碑」があり、現在も春には牡丹の花を見ることができます。

法華寺白牡丹

色即為貞白

各猶喚牡丹

嫌随凡草種

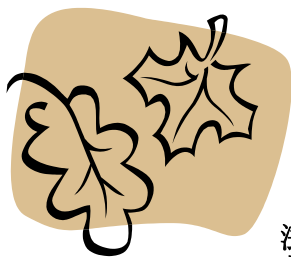
好向法華看

在地輕運縮

非時小雪寒

繞叢作何念

清淨写心肝



【意味】 色はとりもなおさず真つ白であるが、名はやはり丹という字のついた牡丹と

よぶ。普通の草なみに植えるのは好ましくない。牡丹の花はまさしく仏法の光華の象徴とみるにふさわしい。地上に薄雲が凝り集まったかのようなのである。晩春だというのにならぬあの雪が降ったかのようにその白さはそぞろ寒ささえ覚えさせる。白牡丹の植え込みの草むらをめぐりながらどういう念願が私の心の中に沸き起こってくるのであろう

か。私は牡丹の花の清浄潔白な姿に私の心肝をうつし、注ぎたい。

【『日本古典文学大系 七二巻 菅家文草菅家後集』一九六六 岩波書店 より】

8 国分寺北部小学校校門（市指定文化財）

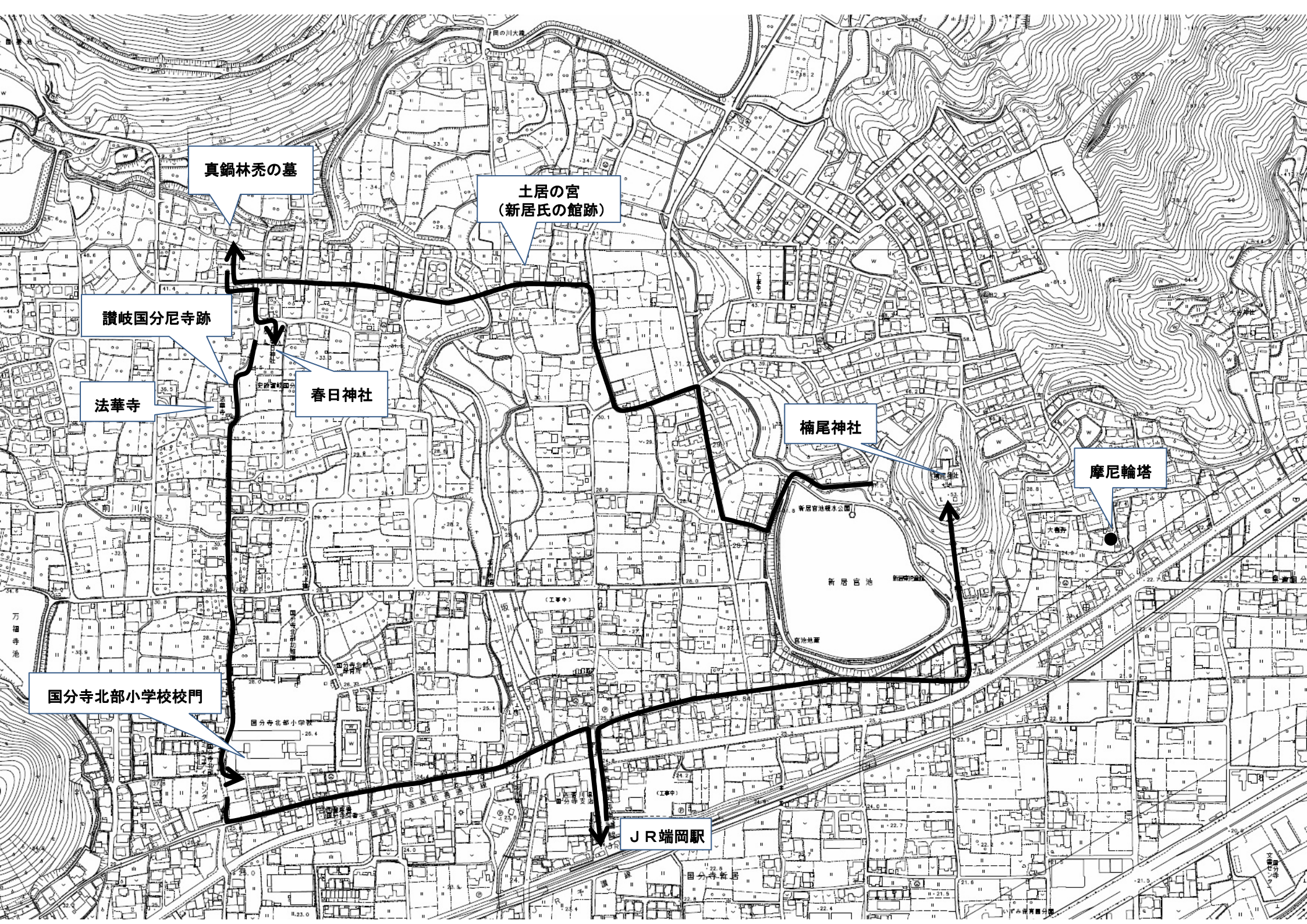


明治二十七年に端岡尋常小学校として創立した国分寺北部小学校の校門は、当時県下でも珍しい赤煉瓦で造られています。下半分はコンクリートにより補修されていますが、上部は当時のままです。国分寺北部小学校のシンボルで、赤煉瓦造りであることから「赤門」と呼ばれています。

【参考文献】

『さぬき国分寺町誌』国分寺町

平成十七年三月発行



真鍋林禿の墓

土居の宮
(新居氏の館跡)

讃岐国分尼寺跡

法華寺

春日神社

楠尾神社

摩尼輪塔

国分寺北部小学校校門

JR端岡駅

2月23日(日) 国分寺町からの復路

◆JR予讃線

(端岡駅)		(高松駅)
12:07 発	→	12:19 着
12:14 発	→	12:25 着

次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 滝宮周辺の社寺を訪ねる

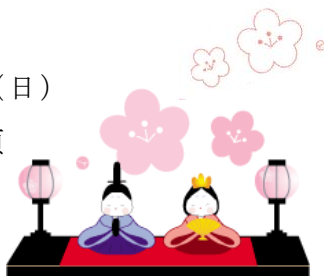
とき 平成26年3月16日(日)

9:30～12:00頃

集合場所 ことでん滝宮駅

講師 水野 一典さん

(四国民俗学会理事)



☆広報「たかまつ」3月1日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課(TEL 839-2660「午前7時30分～開始時間まで」)でお知らせします。(電話が通じない場合は、「実施」です。)

★次回の交通案内★

◆ことでん琴平線

(瓦町駅)		(滝宮駅)
8:05 発	→	8:42 着
8:35 発	→	9:12 着



「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。